

■採択年度（タイプ・申請区分）※該当の口を■にしてください。／大学名

【ASEAN 対象】H23（A-Ⅱ）H24（Ⅰ）H24（Ⅱ）【AIMS】H25／九州大学・早稲田大学

■プログラム名

地球資源工学グローバル人材養成のための学部・大学院ビルドアップ協働教育プログラム

—以下、タイに特化した内容を主に記載ください。—

■相手大学・機関（国名も記載ください）

バンドン工科大学（インドネシア）、ガジャマダ大学（インドネシア）、チュラロンコン大学（タイ）、フィリピン大学（フィリピン）、マレーシア科学大学（マレーシア）、ホーチミン市工科大学（ベトナム）、カンボジア工科大学（カンボジア）

■主な活動内容（概要）

将来グローバルに活躍するために実践経験を積む「国際インターンシップ」、相互学生交流を強化する「スクールオンザムーブ」、高度研究者・技術者リーダーを養成するための「大学院ダブルディグリー」の質保証を伴う3つのビルドアップ（積上式）協働教育プログラムを通じて、資源開発とそれに関係する地球環境問題に関わる学術である地球資源工学分野で、日・ASEANの学生が将来グローバルに活躍する人材を養成することを目的としている。

■プログラムの現状・課題、成功事例

（単位互換、危機管理、寮・奨学金、その他プログラムをつくる上での障害等について、できるだけ具体的に記載ください）

現状・課題

九州大学での本プログラムの実施における問題点としては、「大学院ダブルディグリー」における単位互換制度の協定作りにおいて、想定以上に時間を要している。特にチュラロンコン大学は、ダブルディグリーで派遣させる場合、授業料を徴収するシステムが構築しているため、学生に取ってみれば国内と二重に授業料が取られるという問題があり、この克服が極めて困難である。フィールド教育の実施では、天候に左右されるため、大幅なスケジュールの変更を余儀なくされるケースもあり、その場合、経費の利用に関する事務処理がかなり複雑になり時間を要する。さらに、今年度はタイの政情不安により、サマースクールで予定していたインターンシップ先を他のASEAN諸国に変更せざるを得なかった。

成功事例

ASEAN大学学生と日本人学生がサマースクールならびにスクールオンザムーブの中で一緒にインターンシップならびにディスカッションを行うプログラムを準備しており、双方向の人的交流が行われている。また海外からの留学生とともに通常の講義を英語で受ける機会があり、またサマースクール等も留学生を交えて行われていることから、普段から英語による表現力・発表力・ディスカッション力を訓練できる場を設けており、コミュニケーション機会確保に伴う各大学との協力体制が強化されている。なお、政情が安定していた昨年度は、サマースクール、スクールオンザムーブとも当初計画していた内容が遂行できた。